

## 生成AIを業務で活用する企業が増加

### ◆三井化学はこれまでのIBM Watsonによる新規用途探索に生成AIを融合

2023年4月12日、三井化学は、これまでのIBM Watsonによる新規用途探索の取り組みに生成AI（ジェネレーティブAI）の一つであるGPT（Generative Pre-trained Transformer）を融合させることで、三井化学製品の新規用途探索の高精度化と高速化の実用検証を開始すると発表した。

三井化学は22年6月から、IBM Watsonによる新規用途探索の全社展開を実施してきた。これまでに、20以上の事業部がIBM Watsonを活用し、100以上の新規用途を発見したという成果があがっている。事業部の一つのテーマにつき、500万件以上の特許・ニュース・SNSといった外部ビッグデータをIBM Watsonへデータ投入し、さらに三井化学固有の辞書を加えてデータセットを構築している。長年の豊富な経験や専門知識を持った、営業・事業領域の現場のスペシャリストが、IBM Watsonを活用して、効果的にビッグデータを分析することで、先入観や既知の知見にとらわれない新規用途を発見することが可能となった。新規用途の発見成果は出ているものの、それなりに時間が掛かるという課題があった。

この課題に対し、生成AIのひとつであるGPTを活用した。採用したのはマイクロソフトのAzure OpenAI Service上のGPTで、ビッグデータに対し、新規用途探索という目的に合わせたプロンプト（GPTに与える指示）を工夫することで、三井化学が注目すべき新規用途候補を特定・抽出できる。さらに、注目すべきと考える根拠や外部環境要因を表示させることで、新規用途探索の高精度化と高速化を実現する。最新のAzure OpenAI Serviceでは、GPT-4の利用が可能のため、自然言語のほか、SNSの動画も含めたマルチモーダルの解析が可能である。

### ◆マイクロソフトはAzure上にOpenAIのサービスを提供している

マイクロソフトはクラウドサービスMicrosoft Azureにおいて、オープンソースの人工知能（AI）であるAzure OpenAI Serviceを提供している。Azure OpenAI Serviceでは、OpenAIが開発したChatGPTを含むGPT-3シリーズ、GPT-4シリーズ、Codexシリーズ、埋め込みモデルの4種類のAIモデルを利用してプログラム開発が

できる。GPT-3シリーズは、自然言語を理解・生成できるモデルのシリーズでChatGPTが含まれる。GPT-4シリーズは、GPT-3と比べて、幅広い一般知識と問題解決能力を有するといわれ、入力された画像を解釈し、内容を文章で出力できるなどの高度な能力を持つ。Codexシリーズは、自然言語の記述からプログラムコードを生成するAIモデルである。埋め込みモデルは、現在使用しているツールに分析機能を「埋め込む」ために使用するモデルセットで、「類似性、テキスト検索、コード検索」を埋め込むことができる。Azure OpenAI Serviceはクラウドベースのサービスのため、ハードウェアやソフトウェアを用意する必要なくすぐ始めることができる。また、ChatGPTのような大量の計算が必要なサービスを利用する場合、GPUやメモリなどのリソース追加がその都度可能であるため、スケーラビリティにも優れている。

#### ◆パナソニックが社内ChatGPTを導入し全社社員が業務利用

23年4月14日、パナソニックホールディングスは、パナソニックグループの国内全社員9万人向けにAIアシスタントサービスPX-GPTを展開したと発表した。AIをグループ全社に導入することで、部門を問わない社員の生産性向上と業務プロセスの改善、ビジネスアイデア創出を目指していく方針である。

PX-GPTはパナソニックコネク트가既に活用しているConnectGPTを、全社向けに改良したものである。なお、PX-GPTの画面には「社内情報・営業秘密・個人情報などの入力はしない」など、AI活用に関する注意喚起やルールが掲載されている。

パナソニックコネク트가ConnectGPT導入プロジェクトをスタートさせたのは、ChatGPTが話題になる前の22年10月で、市場調査や商品開発に使えないかと構想したことから始まった。23年2月17日には、ConnectGPTを国内全社員に向けて展開した。ConnectGPTはマイクロソフトのAzure OpenAI Serviceを活用して開発されている。全社員が業務での活用シーンをイメージできるように、「専門的なアドバイスを聞く」「ITサポートを聞く」など15個の活用方法をサンプルとして提示している。社内では、データ分析やデジタルマーケティング、プログラム開発支援などの分野で活用が進んでいる。

生成AIの業務利用は、機密漏えいリスクなどから慎重な企業も多いが、積極的に導入を進めている企業は確実に増えている。

【成田誠】